

## コンゴ伝道に見る異文化接触（49）

おやさと研究所准教授  
森 洋明 Yomei Mori

今年5月から6月にかけて、5人のコンゴ人が柔道の研修のため天理に滞在した。コンゴからの柔道研修は、1968年にンガサキ・パスカル氏とディンガ・パスカル氏が来て以来のことである。この2人が天理で柔道研修をすることになったのは、コンゴで清水國弘二代会長がコンゴ柔道連盟に顧問として招かれ、コンゴにおける柔道の普及と技術向上の活動していたからである。コンゴ国内で選手権が行われ、優勝と準優勝をとったこの2人が柔道研修生としておぢばに招かれた。

柔道に関してさらに遡ると、コンゴ伝道が始められた当初から、真田末光氏や高橋武男氏、また天理大学柔道部設立と共に初代師範に就任した松本安市氏といった柔道師範が、コンゴに出向いている。こうして「天理柔道」の名前は、現地の関係者の中で知れ渡っていくようになった。そこには、柔道を通じての伝道のあり方を模索していた様子が窺える。

おぢばでの1年間の研修をしたンガサキ氏とディンガ氏は、清水氏の弟子に当たる。研修を終えた彼ら2人は軍隊に所属し、大統領のセキュリティとして登用される。おぢばにいる間によろしくとなったが、教会に日参したり、月次祭におつとめ着で奉仕したりするということとはなかった。しかし、天理教の名前は彼ら2人の存在によって、政府の中にも浸透し、信用を得るようになる。また、ンガサキ氏は何か事が起こる度に教会の力となり、2000年以降の教会復興の道中で教会の存続が危ぶまれるようになった時も、政府関係者などに働きかけ、また教会スタッフにも実務的、精神的アドバイスをし、教会の大きな力となった。彼は現在もコンゴ柔道連盟のために奔走していると聞く。

このンガサキ氏の弟子に、ディンガ・レオン氏がいる。現在、彼はコンゴ国軍の大佐で、2007年にンガサキ氏と共におぢばがえりをし、短期間ではあったが天理大学で柔道研修を行った。その時に天理の雰囲気接触した彼は、教えの一端にも触れ、よろしくではないがコンゴブラザビル教会の月次祭には参拝する「信者」となった。今回天理に来た5人のコンゴ人柔道家は、このディンガ氏が責任者となっている軍の柔道クラブの先鋭たちで、コンゴ柔道を代表する人たちだった。



ディンガ氏（左から3番目）と5人の柔道研修生

外にコーラスや空手（一時休止中）、学校経営や農業などが行われているが、柔道は行われていない。コンゴブラザビル出張所（1975年～1986年）が置かれていた時代に、教会における柔道活動の再開が何度も叫ばれていた。教会敷地内に道場を建設する計画も

あり、設計図も作成されていた。また、柔道指導を目的として柔道経験者の第二専修科卒業生（吉田義晴、田中範道、山口悟）がコンゴに派遣された。しかし、さまざまな事情により実現には至らなかった。それでも、1967年から清水氏が約5年にわたって行った柔道は、40年の歳月を経てこのような形となって現れてきたのである。弟子から弟子へ、清水氏から見れば、今回の5人は「曾孫」世代にあたる。

今回の天理での柔道研修で特筆すべきことは、この研修が本部の招待で行われたのではなく、コンゴ側からの要望で実施されたものであったことだ。したがって旅費や滞在等は



ディンガ氏が責任者となっている軍の柔道場一切現地でもまかなわれた。彼らは、7月にブラジルで開催された各国の軍隊による国際スポーツ大会に出場が決まっていたコンゴの代表選手たちで、それに向けた技術向上のための研修でもあった。おぢばでの滞在は、コンゴブラザビル教会は本部直属教会であるが天理市内に詰所がないので、海外からの柔道研修等の滞在接受入れている他の教会の詰所に宿泊した。滞在中、神殿案内を受け、天理教基礎講座も受講した。また、彼らの要望に応える形で、海外部では彼らのために特別の教義勉強会を開催し、フランス語スタッフが交代で教理の説明を行った。柔道がどうして天理でこれほど盛んになっているのかが彼らの関心でもあったようで、二代真柱が柔道家であったというだけでなく、天理のスポーツ全体が「かしまの・かりもの」の教理に基づいた中で発展していることに、おおいに感銘を受けたようだった。帰国する際には、もう一度このおぢばに来る機会があれば、ぜひ別席を運びたいとも言っていた。

コンゴ伝道初期から蒔かれた柔道という一粒の種に芽が吹き、その枝葉が広がろうとしている。いつの日か多くの実がなることが期待される。

コンゴ共和国がある中央アフリカ一帯は、大変肥沃な土地である。年間降雨量が多く、日照時間も多いため農作物は大変良く育つ。コンゴ人との会話の中で「Je me débrouille」（自分でなんとかする）という表現をよく耳にするが、これは定職がなくても何とか生きていくという時によく使われる表現である。土地が肥沃で食べ物には困らないという社会背景があるのではないだろうか。内戦以降一時、教会の隣接地は畑となっていたが、肥料も十分に与えられていないにもかかわらず立派な野菜が育っていた。教会内に植えられたマンゴーやアボカドなどは、日頃何の手入れをしないのに、季節が来ると必ず大きな実をつける。パパ



イヤに至っては、黒い小さな種を適当に放っておくだけで、あちらこちらから芽が出て、数年間で立派な幹ができ実をつける。コンゴではまさに「まいたるたねはみなはへる」(七下り目8)ということが、日々の生活の中で実感できる環境なのである。



種は蒔かないと実はない。しかし「実」というものは、どのような形で現れるのか想像がつかないこともある。コンゴ伝道の歴史の中では、いろいろな形で伝道に関わったさまざまな人たちによって蒔かれた種が少しずつ芽を吹き、実をつけてきた。またこの柔道のように、今も新たな芽が吹き出ようとしているものもある。現在のコンゴブラザビル教会には、身上の障りをたすけられた人たちや親の信仰を受け継いだ人たちは言うまでもなく、診療所や柔道、鼓笛隊などの活動に参加して教会につながるようになった人たちや、学校や農業など教会が運営する「事業」に参加しつつ教えに触れ、この道を歩むことを決心した人たちもいる。他にも、日本人が珍しくて小さい頃から教会や布教所に入りしなごら自然とこの道に引き寄せられた人、朝夕の太鼓の音に興味を持ち教会に足を踏み入れた人、病人におさづけの理を取り次ぐ姿を見て天理教と出会った人、内戦時の避難生活の中で人に見せてもらった「おふでさき」を読んで「真実」を悟った人、読めば痛みだすという病気の目で教祖伝だけは問題なく読めたことに自身のいんねんを自覚した人、真柱との出会いが入信の決め手となった人、幼い頃に日本人と一緒にした草刈りの経験が忘れられず大人になって信仰に目覚めた人……多くの種が蒔かれてきたコンゴ伝道の歴史の中では、すぐ実ったものもあり、なかなか実らないものもあった。また、まだ実っていないものもあるかもしれない。あるいは、実った後で枯れ果ててしまったものもあるだろう。

何を「実」とするのかは視点によるだろう。しかし少なくとも、二代真柱とノソング氏の出会い(1960年)から始まったコンゴ伝道は、天理教としてコンゴに蒔かれた一粒の種であることには間違いなく、教会で展開されている今日の様子からは、一つ大きな実がなったと言えるのではないだろうか。この実からさらに多くの種を残し、その種がさらに一層多くの実をつけるための「修理・肥」のあり方が、今のコンゴ伝道に問われているように思う。

コンゴにおける日本のイメージは大変良く、日本人の評判も概ねよい。日本人というだけでいろんな恩恵を受けることができる国柄である。また、宗教もコンゴ人の日常生活の中に深く関わっている。宗教に対して偏見を持たれることが多い日本と比べると、布教活動がしやすい土地なのである。宗教家や伝道師は尊ばれ、話を聞いてもらえる。そこには、植民地時代からの国民総キリスト教化の名残もあるかもしれないが、それ以前からコンゴ人の精神文化にあった、この世を創造し万物を司る「神」への信仰も影響していると思われる。布教師は「布教師」としての確固たる社会的地位があり、国家行事にも招待される。

例えば旅行の際、教服を着ていると、空港でのさまざまなチェックがスムーズに進むという。このような状況を考えると、コンゴは天理教の布教伝道活動にとっても、大変「肥沃」な土地であると言えるだろう。

だからこそ、それだけ「肥沃」な土地柄での伝道であるにもかかわらず、また半世紀以上の伝道の歴史にもかかわらず、さらに人類普遍の教えであるのにもかかわらず、コンゴブラザビル教会に何百、否、何千、何万という単位で信者が集まらないのはなぜなのか考えたくなくなる。キリスト教が根強く、他のアフリカ諸国同様イスラム教の波が押し寄せているからということもあるかもしれない。しかし、昨今コンゴで活発な活動を展開し、何千という単位でコンゴ人を引きつけている新興宗教も少なくない。会長をはじめ布教師たちがにをいかけやおたすけを怠っていたのかといった次元の話でもない。むしろ、今までどれだけの日本人布教師やコンゴ人ようぼく・信者が、にをいかけやおたすけに尽力したことであろうか。

その原因を考える方向性はむしろ、コンゴという日本とはさまざまな面で異なる、いわば「異文化圏」での伝道の中で、越えなければならない何か大きな「壁」が存在するのではないかと考えることではないだろうか。言葉や文化、社会、歴史、民族などの違いを乗り越え、「いられつたすけ」を目指す天理教の教えを多くのコンゴの人たちと分かち合うようになるためには、これまでの国内や海外の日系移民、また仏教や儒教といった共通の精神文化を持つ地域とは異なる新たな布教伝道の方法論の展開が必要ではないかと考える。

おぢばから遠く、日本とコンゴの経済格差も大きい中で、信仰をするほとんどのコンゴ人にとって「おぢばがえり」は夢物語であると言っていいだろう。それは、おさづけをいただけない、つまり「ようぼく」になることができない人がほとんどであることを意味している。すべての人が日本語を解せないのも、最も重要である「おつとめ」の意味世界に、日本人と同じような形で入ることができない。また、出産にはまだまだ多くの危険が伴う国でありながらも、「をびやゆるし」をいただくことはできない。一生かけてもか

(14頁へ続く)



教会が管理・運営している畑



子どものコーラス隊



天理総合教育施設(小学校の部)

**出張報告**

**日本福祉のまちづくり学会・第14回全国大会に参加して  
テーマ「移動の自由がつむぐ心豊かな社会—ひと・まち・文化—災害に強いまちづくりをめざして」**

八木三郎

8月27日から29日まで、日本福祉のまちづくり学会主催の全国大会が堺市において開催された。この福祉のまちづくり学会は1995年1月の阪神淡路大震災の復興支援活動を契機に全国的な福祉のまちづくりの活動の連携と学術研究を目的として、専門分野の横断組織として1997年に設立されている。当初は「福祉のまちづくり研究会」という任意団体としてまちづくりの研究とその活動を推進してきたが、2011年4月に「一般社団法人日本福祉のまちづくり学会」として新たに生まれかわった。この学会は、多分野における研究者の協働、連携を最大限に生かし、すべての市民生活の安全・安心を活動の柱として、我が国の福祉のまちづくりの発展に寄与する研究理念・目標を掲げている。

毎年開催されるこの全国大会は、法律家や社会福祉関係、その他工学関係等の異なる専門分野の人たちが集結し、さまざまな角度から「福祉のまちづくり」について研究・開発し、その成果を発表する場として、また福祉のまちづくりのあり方を考える機会の一つとして開催されている。

(5頁からの続き)

んろだいを間近で拝することができない人が大多数である。このような状況において、天理教を信仰することはどういうことなのか、改めて考え直す必要があるように感じる。

この「天理異文化伝道の諸相」は、「天理教の海外伝道史を概観すると、伝道史実の記録や、個人の伝道者の伝記などが数多く見られる。しかし、意図的に海外伝道を、異文化接触の視座から調査研究した文献はほとんど見られない。」(『グローバル天理』第1号、井上昭夫)というところから、この『グローバル天理』発行と同時に始められた。36回までは、堀内みどり氏が「天理教のコンゴ伝道」と題して、コンゴ伝道の発端からノソング・アルフォンス4代会長就任までの歴史を振り返った。またそれを受け継いだ形で私は、「コンゴ伝道に見る異文化接触」と題して、コンゴ伝道に携わった人たちの証言や自身のコンゴ伝道の経験を基に、異なる文化の接触という視点で話を展開してきた。これまで、コンゴでの伝道活動の中で見られる言葉や文化、価値観、経済格差、社会や政治的背景などに起因するさまざまな事象について考察した。また後半は、4代会長就任と共に設立されたコンゴブラザビル出張所以降の歴史を年代順においつつ、その中で起こったいろいろな出来事や問題を検証し、そこから天理教の海外での伝道のあり方に対するさまざまな問題点にも触れてきた。

一つの伝道の歴史には、成功したこともあれば失敗したこともある。それは試行錯誤の繰り返しであるかもしれない。そして現在もまた未来も繰り返されていくことだろう。こうしたことを一つひとつ検証することこそ、これからの伝道のあり方を

1日目は、福祉機器、建築・住環境、視覚障害者と誘導支援、災害・震災、まちづくり、交通・移動、教育、地域社会ほか合計19のセッションに分かれて研究発表が行われた。

2日目は、今回の重要なポイントである特別研究討論会「東日本大震災を経て：福祉・まちづくりの新生にむけて」をはじめとして、「交通バリアフリーの総括」、「障害者差別禁止法」、「交通基本法」等のセッション別のパネルディスカッションが行われた。そして、2日目の締めくくりとして、市民公開シンポジウムが行われた。ここでは「移動の自由」に焦点をあて、本大会のテーマに掲げた心豊かな社会、ひと・まち・文化を構築するためには福祉のまちづくりはどうあればいいのかについて、午前の各討論会の報告をまじえ、熱心にディスカッションが行われた。

3日目は、福祉のまちづくり環境の体験見学会(ユニバーサル・サイクル体験等)が催され、参加者はそれぞれ希望するコースに参加し、その後閉幕となった。

本大会は、2011年3月11日に発生した東日本大震災によって被害を受けた地域、被災者の状況を国・自治体・市民・研究者などそれぞれの専門分野から検証し、総力あげて復旧、復興への歩みについて熱心に議論が交わされた大会となった。またそれは、単なる復旧を意味するのではなく、新たな福祉のまちづくりに向けて多くの知恵の結集が不可欠であることを確認した大会でもあった。

考える上で重要なことであり、その検証は「〇〇が悪かった、〇〇は良かった」という個人批判をすることでは決してない。批判されるべきことはむしろ、このような検証を行わず、言い換えるなら過去の貴重な体験を活かさずして、同じ失敗を何度も繰り返すことではないだろうか。

コンゴの伝道に関わってきた者の一人として、また現在も関わり、これからも関わっていく一人として、このような検証の場を得ることができたのは大変有りがたいことであった。コンゴブラザビル教会は今日も活動を続け、一步一步前に向かって進んでいる。その歩幅は狭くとも、またその道のりははるか長いだろうけれど、彼らと共に歩む中で、また何時の日かこの続編が書けるようになることを願い、このシリーズを終えることにする。ありがとうございました。



コンゴブラザビル教会から5人が受講している今年9月から始まった修養科フランス語クラス

